

郷土室だより

「続」中央区の「橋」

(その4)

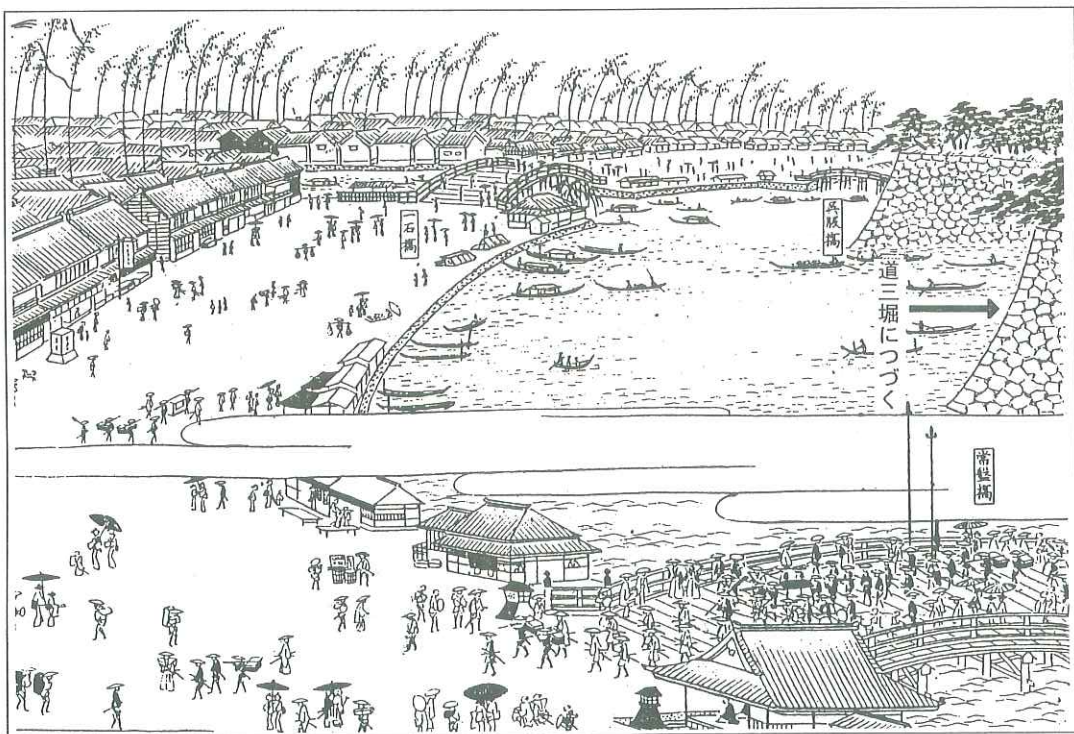
◇タイトルの話し

前号の表紙に掲載した地質図について、いろいろなご意見を頂きました。やはり本来のカラーの図を白黒に略図化したのですから、どうしても表現に無理な点があったことや、そのうえ凡例に「誤植」がある事などの指摘もありました。

しかしこのような略図でも筆者が主張したい事について、多くの読者が関心と理解を寄せてくださった事がわかり、大変有り難く存じました。この場を借りてお礼申し上げます。

前号の図をつくる時、その範囲を意識的に「江戸城」を含めたものにしたのは、『慶長見聞集』巻之五の「日本橋、市をなす事」の項を引用した際、「御城大手の堀を流れて落る大河一筋有」という記事にある「大河」の実態に触れなかったためです。この「大河」はすでに同じ『見聞集』の巻之一に「江戸川橋にいわれ有事」というタイトルで取り上げられています。

その部分を引用する前に、お断りしておきたいのは、この項は全部で一八二四字



「東都歳事記」 斎藤月岑 著

あつてかなり長く、その上、江戸以外の話や、違う時代の話が混じっています。

そこで、ここではその中の原文の紹介を最小限にして、必要に応じて注を付けて紹介します。

まずタイトルの「江戸川橋」という表現は、今の地下鉄の駅名で御馴染みの「江戸川橋」的なものではなく、文章全体からすると、その範囲は非常に局限されていて、ほぼ前号の図の範囲が江戸の川とされています。

ですから江戸城の堀を含む水面が「江戸川」を意味していたわけで、それでタイトルは「江戸川の橋」または「江戸の川橋」といったような意味を含ませたのでしよう。

◇『見聞集』の見聞

前置きはさておき、その本文の最初が「江戸に古より細き流ただ一筋あり。此水、神田山岸の柳原より出るなり」（中略）と、「大河」の話が「細き流れ」から始まります。

次の段は「然ば此水御城堀の

めぐりを流て舟町へおつる。この流に橋五つわたらせり。」と有ります。

一段目の川は現在の昌平橋辺から流れ出した「神田川」の事でしょうが、それが二段目では城の周りを経て舟町に流れる事になっています。

三段目はその五つの橋は「皆たな橋にて名もなき橋どもなり。」で、「名が無い」と言いながら上流から、来日した「唐人」の御馳走用に集めた雉の小屋の側にある橋だから雉子橋、その下流に丸木を一本渡したから、ひとつ橋だと説明のあるのが、現在の日本橋川（原形は平川）に掛かった橋のことです。

次に竹を編んで掛けた「すのこ橋」の竹橋があって、その続きに「御城の大手の堀に橋一つかかりたり。（中略）大橋と名付けたり。」という水面は、九段下の牛ヶ淵から続く旧江戸城内堀に掛けられた橋です。

そしてこの記事には竹橋の上流の清水門や竹橋と大橋の間の平河門橋が抜けています。

またこの一連の内堀がこれまで

に紹介した日比谷入江の一番奥の部分に当たるわけです。

次は「町には舟町と四ヶ市のおひに、ちいさき橋只一つ有。是は往復の橋なり。」で、この橋を文禄四年（一五九五）に「銭がめ橋」と命名した由来を含めて、合計五つの橋を説明しています。

この様に『見聞集』は、五つの橋が初めの柳原の「細き流れ」とは勿論、それぞれの水系も違い、橋の下の水面の成立の仕方もまったく違う橋を「江戸の川」にかかるとしてあたかも一続きの水系のような書き方で紹介しています。

◇銭瓶橋

なお注目したいのは最後の銭瓶橋だけが、一般庶民が「往復」できて渡れる橋だったことです。

銭瓶橋は徳川家が江戸で最初に自前で工事した運河の道三堀に掛けられた橋でした（道三堀は今は今を消した、和田倉門と大手町交差点と呉服橋交差点間にあった運河のことです）。

ですから銭瓶橋は徳川氏が江戸市中に掛けた最初の橋といって良

いでしよう。

そのためこの橋は『慶長見聞集』を初め、『参考落穂集』、『江戸砂子』、『遊歴雑記』、『江戸紀聞』、『武江年表』などの地誌・年表類に漏れなく取り上げられています。

橋名の由来は橋の工事中に永楽銭の入った瓶が掘り出されたことに因んだものでした。永楽銭は中国から輸入された外貨で、織田信長が旗印に多用したことも有名です。

つまりこの銭は当時の富の象徴だった輸入貨幣で、それが入った瓶の発見はビッグニュースだったわけです。

なおこの橋の位置は前掲の書物の順に、それぞれ次ぎのように書かれています。

「舟町と四日市のおひ」、「大川を御城内まで掘入れられ候セつ」、「ときは橋とごふく橋の間也」、「壱石橋銭瓶橋の始元：（注）一石橋の西方という意味か」、「常盤橋と呉服橋の間なり」、「見聞集に同じ」などで、しいて現在の地点を示すと千代田区大手町二丁目

の日本ビルの南東端に当たります。

◇たな橋と天竺橋

『見聞集』は続けます。「其見し棚橋どもは皆朽果て其跡 堀川となり、今は 夥敷^{おびただしく}橋かかりたり。されば昔のたな橋は、絶て久敷成ぬれば名こそながれて猶聞えけれ、(中略)今は東西南北の町に大河多く見えけれども皆 堀川なり。橋もかぎりなく出来たり。」

この記事は江戸の発展と共に「大河」と形容された「堀川」、つまり大きな運河が縦横に掘られて水路ができ、その水路に沢山の橋ができていった有様を、良く描写しています。

そして初期の江戸の橋は「たな橋」が多かったこと、それは当然長持ちせずに「朽ち果て」た後に、「改架されて」見るべき橋が出来ていったと書いています。

この「たな橋」＝棚橋とは国語辞典には、棚の形に架けた板の仮橋、または欄干(手摺り)のない橋などとあります。具体的にはこれも例の『一遍聖人絵伝』などで見られますが、近世都市江戸の「たな橋」とはどの様なものだったか。

たかは、まったく分かりません。

「たな橋」の時代の「堀川」の幅は狭くて、やがて「堀川」の拡幅が繰り返された結果、現在見る事ができる木橋の平川門橋や和田倉門橋のような規模と構造に進歩したのか、それとも最初から橋長は現在と余り変わらずに、橋幅が狭く欄干もない橋が多かったのではないかといった想像もできます。

そして『見聞集』のこの項の纏めの部分は
「此 江戸川に橋なくんば幾千人 川のみくずと成て、いたづらに命をうしなはん事必定、有がたき橋の威徳也。然ば先年江戸大普請の時分、日本国の人集て掛けたる橋有。是を日本橋と名付たり。又その川すそに空へ高き橋有。是を天竺橋といふ。これらの橋は御代目出度時分新規に出来たるによりいづれも名高き橋どもなり。」と結んでいます。

前号で検討したように、この「江戸大普請」が何時の工事を指すのか？

また「その川すそ」とあるから下流に「高橋」、中国式表現での「虹橋」形式の「天竺橋」という

橋があった事などが書かれています。

江戸の「高橋」については前々号(一〇二号)のほぼ半分を費やして取り上げましたが、「空へ高き橋」の「天竺橋」は前号の図に見るように、江戸湊の出口、言い換えれば川と海の境に掛けられた「水都」江戸を象徴する橋だったのです。

それゆえに後に「江戸橋」と改称されたとしてもごく自然のことと考えられます。

私はこの『見聞集』の記事から「天竺橋」は、現在の江戸橋の原形だと推定するのです。

江戸橋は日本橋と並ぶ都心の代表的な大橋ですが、俗に「寛永江戸図」と呼ばれる『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永九年一六三二当時の図)には、

- ①江戸橋が描かれている図と、
- ②描かれていない図

と、さらに周囲の橋が俯瞰図的に反った形で欄干まで描かれているのと対照的に、

③江戸橋だけが「取って付けたように」直線で描かれている図などの異版がかなりあります。

余談ですが、この「寛永江戸図」は私が調べた限りでも二七種類の図があり、大体が同じ内容でも子細に見比べるとそれぞれが非常に個性的でもあります。そして日本橋に関する資料の豊富さに対して、この江戸橋については天竺橋との関係も含めて纏まった形で取り上げた資料は案外にありません。この事なども今後の江戸研究の課題の一つだと考えられます。

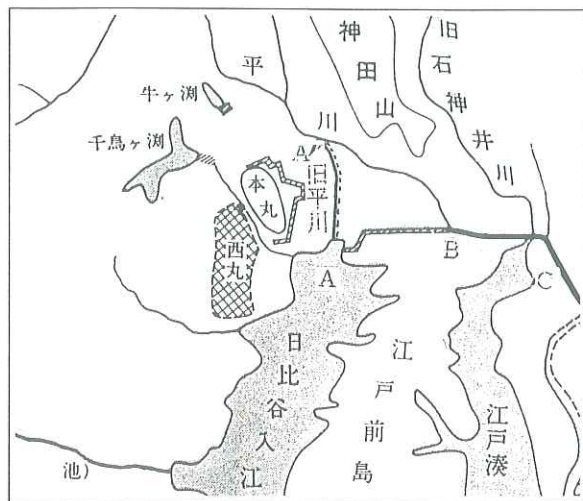
◇道三堀の出入り口

『見聞集』では道三堀は、銭瓶橋の地点から「大川を御城内まで掘入り」る目的のものでした。

そこでその「大川」が問題になってきます。銭瓶橋に通じる水面は、先に挙げた『遊歴雜記』を除く五冊の書物では「常盤橋と呉服橋の間」に繋がっていたとあって、日本橋方面に通じていたとは書いてありません。

文禄四年(一五九五)夏の当時「常盤橋と呉服橋間」の水路だけが日本橋波蝕台地内にあつたわけではありません。

この水路の状態を図によって説



と合流したのですが、繰り返しますがその先の流路の行方が、江戸期の文献を幾ら読んでも明らかににはならないのです。ここでの関心の焦点は、Bの「常盤橋・呉服橋」までの水路から「下流」のBとC間の日本橋・江戸橋方向に流れる水路に関する記事が天竺橋・江戸橋の場合と同じくまったく記録されていない事なのです。

もう一つの推論は、前号の図では余りはっきりしませんが、復興局の「原図」には日比谷入江から「常盤橋と呉服橋間」の水路のところまで、小さな「谷」が入り込んでいます。案外、外堀ができるまでは平川の水は大きく迂回して、埋め立て中の日比谷入江の南方で放流されていたのかも知れません。

(鈴木理生)

明すると、運河の道三堀は図のようにAとBとC間に江戸前島の「付け根」を横断する形に掘られました。

その役割は江戸前島を挟んで西側のAの日比谷入江から、東側のCの江戸湊を結ぶものでしたが、なぜかBとC間の水路造りの事は文献では明らかでは無いのです。文献資料の上では道三堀はAとB間の、西端は江戸時代には辰ノ口、現在の丸の内一丁目の銀行倶楽部の辺りから始まり、東端はB

の銭瓶橋付近までの範囲とされてきました。

当時、平川は日比谷入江に流れていたのを、これも道三堀工事と同時期の徳川の直営工事で、Aの一ツ橋辺から新平川流路で、Bの「常盤橋・呉服橋間」と合流させて、BとC間の後の一石橋・日本橋・江戸橋までを流れて、海に注ぐ水路を作った工事の存在を考えないと、道三堀水路のB点から先の水は行く手を失います。

文献ではB地点で、Aからの流路

なおこの文禄四年の時点から十一年後の慶長一〜十二年(一六〇六〜七)に、徳川氏による第一

回目の天下普請で、呉服橋から鍛冶橋・数寄屋橋・山下橋・内幸橋を経て汐留川に通じる江戸城の外堀の開削が行われました。もちろんこの工事については幕府の記録が残されています。

つまり文献資料に頼ると、その十一年間はB点を経てC点までの日本橋から江戸橋に至る水路が「無くて」水の行き場が無くなってしまうのです。

そこで一つの結論を出すと、BとC間の後の一石橋と江戸橋間の水路は、文禄元年から四年までの徳川の直営工事、AとB間の水路と共に出来ていたのではないかということなのです。

◇日本橋は何時出来た
ずっと、日本橋の「上流」部の道三堀を中心に、江戸初期の「大河」と呼ばれた「堀川」の「流れ方」についての疑問を語ってきました。

初めにもいったように幕府に、このような江戸建設についての公文書が残されていれば、こんな回りくどい考察をしなくても済むのですが、「なぜか」日本橋の成立時期ははっきりとしないのです。

この橋シリーズに限らず、私はいつも「原形」を明らかにすることに拘り続けてきました。それは昔も今もお上りが絡むと「原形」の成立過程も「原形」そのものも変形してしまう場合が多いからです。その意味ではこのシリーズは今日的な作業だと思っっているのです。そしてこの項を書くために改めて、先ほど触れた「原図」の見直しをして、新しい「発見」もあつたのです。この事は機会があれば図を書き替える形で、読者にお知らせしたいと思っています。